

古墳壁画の保存活用に関する検討会  
装飾古墳ワーキンググループ（第6回）議事要旨

1. 日 時 平成25年7月11（木）13：30～16：30
2. 場 所 九州国立博物館会議室
3. 出席者 （委員）  
和田座長、三浦副座長、成瀬委員、矢島委員  
（専門委員）  
今津委員、岡田委員、小椋委員、高妻委員、坂口委員、柳沢委員  
（福岡県教育委員会）  
伊崎文化財保護課長、吉田企画係長  
（九州国立博物館）  
三輪館長、河野文化交流展室長  
（説明者）  
長谷川元桂川町教育委員会職員  
（事務局）  
文化庁：江崎古墳壁画室長、榎本記念物課長、建石古墳壁画対策調査官、林文化財調査官、内田文化財調査官 ほか  
独立行政法人国立文化財機構：  
東京文化財研究所 木川保存修復科学センター生物科学研究室長 ほか  
奈良文化財研究所 田中研究支援推進部連携推進課長、平澤文化遺産部景観研究室長 ほか

## 4. 概 要

- (1) 開会
- (2) 委員及び出席者紹介
- (3) 議事
  - ①九州国立博物館展示（装飾古墳関係）視察  
出席者及び傍聴者で九州国立博物館の装飾古墳関係の展示を視察した。
  - ②福岡県の装飾古墳の保存に係る取組  
吉田企画課長から資料2に基づき福岡県における装飾古墳に関する取組について説明があった。
  - ③特別史跡王塚古墳の取組  
長谷川氏から資料3に基づき特別史跡王塚古墳の取組について説明があった。
  - ④九州国立博物館の取組  
今津委員から資料4に基づき、九州国立博物館における装飾古墳の保存活用に関する取組について説明があり、これまでのことについて次のとおり意見交換等が行われた。  
高妻委員：福岡県や各市町村において温湿度の管理をしていると思うが、ある一定の指針で共通のやり方を決めているのか。  
吉田係長：我々では決めておらず、通常、温湿度管理のデータロガーを設置する際には、東京文化財研究所や奈良文化財研究所に相談し、あらかじめ場所や個数、機種等について指導を受けて設置している。  
坂口委員：王塚古墳では石室内に入らないということを最近は心がけているとの話があったが、入室による影響、中に入ることによって温度が上がったり、いろいろなものを持ち込むリスクを考えて、なるべく入らないようにしているのか。

長谷川氏：そのとおりで、内部に入らなければ問題がなかったということが長年の経験の中であり、人が入るとカビが生えたりする。そのため、現在は入らないことが前提になっている。

柳沢委員：デジタルデータの活用について、インターネット配信もされているようだが、例えばそれぞれの見ている人のパソコンの操作によって任意の角度で見られるなど、コンテンツは開発されているのか。

河野室長：例えばインタラクティブにいろいろな方向から見られるものとなると、九州国立博物館が配信を始めた平成17年段階ではまだPCのスペックが追いつかなかった。例えばVRMLで作ってみたことがあるが、途中で止まるなどなかなか思うようにできなかった。たあ、現在はかなり進んでおり、もちろん配信に伴う著作権の処理などをクリアしなければならないかもしれないが、大いに可能性のある分野の一つであると思う。

小椋委員：保存施設について、例えば石室に入るときに、覆屋はあるけれども何らかの形でそこをオープンにしておくという考え方の施設もあるし、一方できちんと綴じるという考え方で、同じ古墳でありながら異なるのは特殊な事情というとらえ方も、当時の保存の考え方ということも関係があると思われる。非常に長期の話になるのかもしれないし、短期の話かもしれないが、保存施設を一時的に補修するという部分で、できれば統一的な考え方で行ってもらいたい。

#### ⑤装飾古墳の色料について

成瀬委員から資料5に基づき、装飾古墳の色料について説明があり、次のとおり意見交換等が行われた。

和田座長：色料について、年代順に赤と黒の時代から土性顔料、鉱物顔料との説明であった。朱も鉱物顔料であると思うが、朱は除いて考えているのか。

成瀬委員：朱は特殊で、縄文時代から用いられる。土性顔料から鉱物顔料という変遷は、時代はまちまちだが、世界的におおむね同様の変遷をたどっているようである。日本においても土性顔料の時代の初めぐらいに、畿内の中央に関しては鉱物性顔料の時代が始まっている可能性がある。

#### ⑥その他

事務局から、次回のワーキンググループは7月24日に開催されることが報告された。

### (4) 閉会

以 上